
研究創案ノート

『地域』環境問題としての熱帯雨林破壊

— 中央アフリカ・カメルーンの例から —

市川光雄*

**Tropical Forest Destruction in a Local Context:
An Example from Cameroon**

ICHIKAWA Mitsuo*

The economic crisis and structural adjustment in the early 1990s accelerated logging operations and agricultural expansion in Cameroon, which resulted in massive destruction of the tropical forest in the southern part of the country. Even where forest trees remained uncut, animal populations in the forest decreased considerably owing to the excessive hunting pressure imposed by commercial bushmeat trading. Such deterioration of the forest ecosystem posed global as well as local environmental problems, and attracted international attention, since when various projects have been promoted to save the forest ecosystems in Cameroon. While most of these projects are financially and organizationally supported by external sources, like similar projects before them, some are attempting new conservation measures. They emphasize active participation by local inhabitants, instead of applying a top-down bureaucratic method of conservation. These projects are, however, facing difficulties for several reasons.

Against this background, this essay first examines the problems involved in the Western protectionism and nature aesthetics that prevailed in the conservation schemes of the last century. It also demonstrates that the new types of conservation attempts in the area, such as “community forest” and “adaptive management”, have not yet produced satisfactory results, due largely to a lack of understanding of the multiplex relationships between people and nature in the forest ecosystem and of the complex local ethnic relationships in the area. The important thing is to hold a clear image in which people and forest co-exist in a desirable manner, in addition to securing people’s right over the land or compensation for the loss of access to the forest resources. In order to understand the relationships of people and forest properly, and to design a desirable future image, three

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

** 本論文のもとになった調査は、文部省科学研究費補助金基盤研究（課題番号：12371004）によるものである。

types of ecological investigation are proposed here: (1) cultural ecology, to show how people's life and culture depend on the forest and its resources, (2) historical ecology, to evaluate short- and long-term impacts of human activities on the forest environment, and (3) political ecology, to illustrate the relationship between the forest-related activities at the local level and the political and economic situations at the national and international levels.

1. 森林破壊の現状

アフリカの熱帯雨林はコンゴ盆地を中心に広がり、総面積が約1億7千万ha、面積からいえばアマゾン川流域につぐ世界第2の熱帯雨林である。東南アジアや南アメリカの熱帯雨林と比較すると、構成樹種の数や樹高、層構造などが比較的単純だと言われるが、それでも1haあたり60-70種の樹木が茂り、直径60cm以上の大径木だけで15-16m³の材積をもつ堂々とした森林である。とくに、霊長類や有蹄類などの哺乳動物相が豊富で、ゴリラやチンパンジーなどの絶滅危惧種が生息することでも知られている。この豊かな森林が、現在急速に減少している。とくに比較的政情が安定しているカメルーン、ガボンなどでは森林破壊が著しく進んでいる。

カメルーンにおける森林総面積は2,000万ha前後と推定され、そのほとんどがいわゆる湿潤森林（半落葉性樹林を含む熱帯雨林）である。1980年から1995年の間に、この森から200万haもの森林が失われたといわれている。とくに1994年にCFAフランの大幅な切り下げ（50%）が行われ、輸送費・人件費などが相対的に低下すると、以前にはコスト面で採算がとれなかった奥地でも伐採が進むようになった。その結果カメルーンは、ニューギニア、ガボン、マレーシアに次ぐ世界4位の木材輸出国になった。伐採が最高潮に達した1996-98年には、年間平均170万m³、金額にして2億3千万ドルもの木材が国外に輸出されており、これは世界の木材産出高の10分の1に達する量である [Bikie *et al.* 2000]。また、1959年には総森林面積のわずか8%にすぎなかった伐採地域が、1999年には76%にも達している。これに対して、形式的にせよ保護区になっているのはわずか6%あまりで、すべてを合わせても140万haにすぎない。

カメルーンにおける森林破壊には、大規模な伐採だけでなく、1980年代後半の経済危機とそれにつづく構造改革が大きな影響を及ぼしたといわれる [Sunderlin *et al.* 2000]。カメルーンでは1991-92年に、IMFと世銀の圧力によって公共部門の雇用者が減らされ、1993年には賃金が大幅にカットされた。その結果、1983年には7%だった都市の失業率が1994年には24%に達し、貧困層は住民の20%にまで上昇した。こうした都市における生活条件の悪化にともなって、それまでは都市へ流出する一方だった人口が農村に還流をはじめた。それ以前は年間0.7%ほどであった農村人口の増加率が、経済危機以降の10年間には4.1%に上昇した。とくに1993年以降の5年間には、農村への移入の方が移出よりも多くなった地域もある [Sunderlin *et al.* 2000]。

人口の増えた農村では、カカオやコーヒーなどの輸出用の樹木作物から、プランテンなどの

自給および国内消費用の食料の生産に農業の重点が移された。増加した人口を支えるためにまず自給用の食料が必要であったことに加えて、農民自身が価格の不安定な輸出作物よりも、国内で確実に売れる食料の方が有利とみて、すでにあるカカオやコーヒーの畑をそのままにして、食用作物の栽培のために新しい耕地を切り開いたのである。このように、経済危機や構造調整によってもたらされた農村人口の増加と農業形態の変化が森林消失の一因となったというのである。実際、航空写真や衛星画像の分析から、1986年の経済危機以降10年間の森林減少率は、それ以前の10年間の10倍にも達することが明らかになっている。

伐採や耕地化によって森林面積が減少しているだけではない。たとえ見かけ上は立派な森林が残っていても、過剰な狩猟圧などによって「森林の空洞化」が進んでいるところも少なくない。コンゴ盆地の地方では現在もなお、1人1日平均100g前後の獣肉が消費され、住民の摂取するタンパク質の大半をまかなっている [Wilkie and Carpenter 1999]。熱帯雨林地域ではツエツエバエの生息や牧草地不足などのため、一般に家畜飼養は盛んではない。この地域の住民にとって獣肉は、不足しがちなタンパク質の供給源として重要であるが、それだけではない。近年の都市化やそれに伴う森林破壊によって自然との接触を失いつつある住民にとって、獣肉は、家畜の肉や魚などからでは得られない「野生の力」を与えるものとして特別な価値を付与されている。大きな都市の住民は、煙で燻した固い獣肉を牛肉や豚肉などよりも好み、わざわざ高い金を払って買い求めたりする。獣肉の取引自体は以前からあったが、最近では獣肉の流通量・消費量ともに増加し、市場が拡大している。内戦やそれに伴う経済の混乱、インフラの悪化などによって、こ

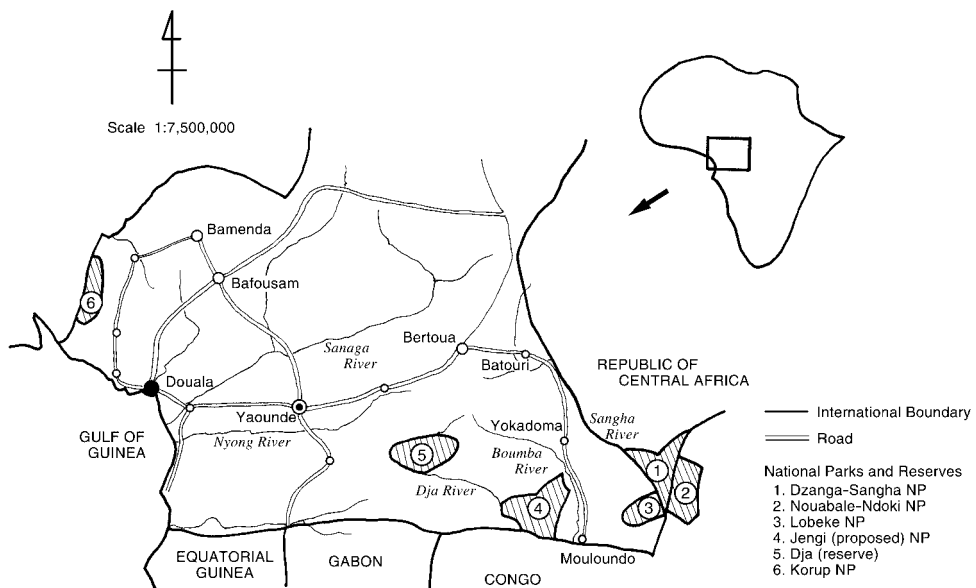


図1 カメルーン東南部における自然保護区

れまで農村における主要な現金収入源であったカカオやコーヒーの出荷が困難になり、それに代わって獣肉が手近な現金収入源となったのである。カメルーンのように、雇用調整や賃金カットなど、いわゆる構造調整の影響によって都市から農村への人口還流が起きたところでは、それがさらに獣肉の交易に拍車をかけている。

狩猟あるいは獣肉の交易は、賃労働などより多くの現金収入をもたらすという報告もある。中央アフリカのザンガ-サンガ (Dzanga-Sangha) 国立公園の付近では、狩猟によって1人年間平均400-700 US \$を得ているが [Noss 1998]、これは公園警備員の賃金と同等またはそれ以上である。カメルーンのジャ (Dja) 保護区の周辺でも、狩猟はハンター1人あたり年間650 US \$もの収入をもたらすといわれる [Ngegues and Fotso 1996]。これらの例をみると、少なくとも短期的にみれば、狩猟はこの地域ではきわめて高収入の活動になっていることがわかる。

このような商業的狩猟の活発化によって、動物個体群の減少が大きな問題になっている。コンゴ盆地では、これまでの狩猟によって森林性アンテロープ類が半減したという報告もある [Hart 2000]。とくにゴリラ・チンパンジーなどの稀少種や、象などの大型哺乳類の絶滅が危惧されている。これらの動物はいずれも繁殖速度が遅く、それだけ狩猟の影響を受けやすいのであるが、熱帯雨林の生態学的条件、すなわち生物多様性の存在がそれに拍車をかけている。特定の種のみを対象とした狩猟では、狩猟圧によって動物の生息密度が減少すると、狩猟効率が下がってやがては狩猟自体が放棄される。しかし多数の種が存在する熱帯雨林では、他の狩猟対象が十分な密度で生息するかぎり狩猟がつづけられる。その過程で稀少種に出会えば、もちろんそれらも狙われるので、繁殖の遅い種や大型種から消滅していくというわけである。

こうした状況を受けて、熱帯雨林の保護活動も活発化しているのであるが、近年の傾向としてこれまでとは異なった形での保護の必要性が指摘されている。従来、熱帯雨林の破壊といえば、地球大気に対する悪影響 (温暖化) や生物多様性 (遺伝子源) の消失といったグローバルな観点から問題とされることが多かった。だからこそそれは、「地球環境問題」といわれてきたのである。そして、「グローバル・コモンズ (全人類の共有資産)」を守るために、すべての人間活動を排除した「野生の楽園」をつくるが必要だとされてきた。これは古典的な保護主義 (protectionism) をグローバル化が進む現代に合わせてアレンジした考え方であるが、ここには大きな問題が孕まれている。地球規模の問題がそのまま地域住民の問題として認識されるほど、世界は均質で統合のとれたものではない。自然保護を声高に主張するのは、たいてい「外部」の、「北」の世界の人間である。現地住民にとってそれは、「そこに住んでおらず、権利ももたない外国人が他人の土地に関して口を挟む」ことだと映るにちがいない。とりわけ、現在のそのような地球環境の危機をもたらしたそもそもの原因が「北」の産業文明と、「北」による植民地の収奪にあったこと [古川 2001] を考えれば、このような批判はもっともといえよう。

しかし現在進行しているような森林破壊や森林の空洞化は、そこに住む地域の住民自身の生

活基盤を脅かしている。彼らの生活と文化を支えてきた焼畑農耕や狩猟活動が持続可能なレベルを超えつつあり、それによって彼らの生活自体が近い将来に立ちゆかなくなるという危機を迎えている。住民にとって森林破壊は、「地球環境問題」というより「地域の環境問題」である。しかし、森林に依存して生活する住民にとって、「野生の楽園」化は、生活の基盤が剥奪されることを意味しており、その意味では森林破壊と変わらない。われわれはだから、従来の自然保護のパラダイム＝「野生の楽園」の設立にかわる、新しい形の自然観と保護のモデルを構築する必要がある。それは、森から人間を排除するのではなく、森の中で人間と自然が共生するような森林保全のモデルである。自然保護については最近さまざまな試みが行われているが、われわれはまだ自然と人間の望ましい関係について明確なイメージをもっていない。自然と人間が共生する世界を確立すること、それは「古典的な」自然保護主義者にいわせればポスト・モダニストの幻想 [Attwell and Cotterill 2000] なのかも知れない。しかし少なくとも自然保護を考えるにあたっては、そうした望ましい世界についてのイメージを明確にしておくことが重要であろう。それを模索するうえで、地域研究がひとつのアプローチを提供するのではないか。それが、私が地域研究につなぐ希望である。

2. 自然保護思想の再検討

従来の自然保護思想の根底には、西欧的な自然観、すなわち「手つかずの自然」を至高のものとする美意識があるといわれる。そこでまず、西欧的な自然美学に関する Crandell [1993] の考察と、アフリカの自然保護に関する Neuman [1998] の論考を参照しつつ、西欧的な自然観とそれにもとづく「国立公園」＝「野生の楽園」の構想にどのような問題があるかを検討しておきたい。

現代における自然保護の端的な表現を、たとえばアフリカの国立公園にみることができる。広大なサバンナで悠然と草をはむ有蹄類の群れ。それを茂みからうかがうライオンやチータ等の捕食獣。彼らが食い残した腐肉に群がるハイエナやハゲタカ。これらは茶の間のテレビや観光ポスターなどでおなじみの光景であるが、そこにはかなり定型化したアフリカのイメージが表れている。サバンナでは、すべてが自然の営みのままに展開しているように見える。これこそが西欧世界がアフリカに求めた「理想の自然」のイメージであり、「アフリカのあるべき姿」である。しかし、そこで働く人間の姿は皆無であり、かつてはそこが牧畜民の生活の舞台であったという事実も隠蔽されている。

Crandell [1993] によれば、国立公園を理想的な自然とするような西欧の自然美学は、17世紀以降盛んに描かれるようになった風景画に由来する。当時の貴族や勃興しつつあった中産階級は、絵画に描かれたような景観を理想的な自然と考え、それを求めて旅に出た。そして、ちょうど一幅の絵をみるように自然に「枠＝境界」を設け、それを外部から鑑賞した。彼らにとって自

然とはつまり、景観であり、「分離」し「観察」する対象であった [Williams 1973]。自然は、快適な車窓から通りすがりに眺める麗しき景色として体験されるもの、いいかえれば「外部」から来た者の鑑賞の対象となった。それは「内部」の居住者＝生産者とは異なる自然の体験であったが、このような美的鑑賞の対象としての景観の成立とともに、「美的な」自然と「实际的な（生産の場としての）」自然が乖離していった。その結果、人為の及んでいない自然 (pristine nature) が理想的な自然とされていったのである。カルチュラル・スタディーズ風にいえば、当時の貴族階級（のちには中産階級）にとって、崇高な自然の鑑賞と賛美は、自己の階級的アイデンティティを確立する機会であった。そして Neuman [1998] が指摘するように、絵画的な風景を求めて当時の貴族が行った旅行 (Grand Tour) は、やがて大衆化したナショナルパーク・ツアーに引き継がれることになる。

このような西欧世界の自然美学を背景に、19世紀の後半（1872年）に世界最初の国立公園がアメリカのイエローストーンに設立された。その後、このモデルにしたがってヨーロッパ、アフリカなど、世界各地に国立公園が設立されていった。

19世紀後半からアフリカに進出を始めた西欧の植民者たちは、「野生的な自然」をそこに見て、自分たちの美意識に形を与えようとした。アフリカには、本国ではとうに失われてしまった「野生の景観」があるとみたのである。ここには、本国すなわち自分たちを「文化」の側におき、植民地を「自然」の側におくという彼らの二元論的対置が反映されている。「手つかずの自然」とされた景観に、何世紀にもわたって足跡を残してきた地域の住民がいたという事実はまったく顧慮されていなかった。

「理想の自然」としての公園の設立には、そこから人間活動を排除するだけでは十分でなかった。彼らの存在をその土地の歴史から消し去ることが必要だったのである。もちろんそうしたことが可能なのは、アフリカはもともと人間の手が加わっていない空白の野生の地であり、そこに植民者の文化的、経済的支配が貫徹することによってそれらが文化的、生産的な空間に変えられていく、という歴史観があったからである。国立公園はこうした歴史観のもとで、かつて植民者が遭遇した原初的景観＝野生状態を記念する遺産となったのである。

しかし、このように人為が排除されることによって、当初想定していたのとは反対の方向に自然の変化が進むこともある [Neuman 1998]。自然の「好ましい」運行にはしばしば意図的、非意図的な人為による介入が必要である。イエローストーン公園では、美しい森林景観を維持するのにある程度の野火の発生が必要だった。しかし、野火は大量の黒く焼けた木を残す。黒こげの木が立ち並ぶ光景はどうみても理想とされている「絵画的な自然」のイメージに合致するものではない。そこで公園当局は野火の発生をおさえる措置をとったのであるが、野火が抑えられたために今度は大量の枯れ木が堆積し、それらが自然発火して手がつけられない大火事が発生したのである。これと同様な現象はあちこちで報告されている。タンザニアのセレンゲッティ国立公

園でも、雄大な眺望が楽しめる草原から家畜と牧畜民が排除された結果、家畜によって生育が抑えられていた樹木が視界を妨げるほどに生い茂った場所があるといわれる。これらの出来事は、「理想の自然」を維持するには、それを放置するのではなく、しばしば人為の介入が必要だということを物語っている。それはまさに、野生生物管理 (wildlife management) という矛盾を含んだ概念が示唆するとおりである。

3. 新しい形の自然保護の必要性

アフリカにおける国立公園の歴史は、土地と資源を巡る植民地政府と地域住民の対立の歴史であった。1960年代のアフリカ諸国家の独立以降も、この対立の歴史はそのまま踏襲された。しかし密猟が絶えないことから、国立公園の侵犯者に対する抑圧は、拷問や射殺を含む厳しいものにエスカレートしていった。しかし、それにもかかわらず、タンザニアでは1980年代に象の個体数が半減し、クロサイに至っては98%も減少するといったように、野生動物の数は確実に減っているという厳しい現実がある [Neuman 1998]。

このような事実を背景にして1980年頃から、強圧的な保護政策に対する見直しが始まった。とりわけ1980年に国際自然保護連合 (IUCM) や世界自然保護基金 (WWF) 等が策定した「世界保全戦略 (world conservation strategy)」において野生生物の保護と地域住民のニーズを調和させるような試みが必要と指摘されると、それ以降は、地域住民の保護計画への参画や保護計画と一体になった開発計画の推進、保護計画から得られる利益の還元などが自然保護の成功にとって必須の条件と認識されるようになった。また、実際にジンバブウェの CAMPFIRE (Communal Areas Management Programme For Indigenous Resources) などの住民参画型の資源管理計画や、カメルーン西部のコーラップ (Korup) 国立公園のように自然保護のコア・エリアと住民の利用が許されたバッファ・ゾーン、それらの外側の開発地域を組み合わせた複合的な保護計画が実施されるようになってきた。さらにカメルーンでは、1994年に旧来の森林法や狩猟法が改定された [Government of Cameroon 1994] が、そこでは「伝統的な」方法による「生計のための」狩猟が認められたほか、住民のためのコミュニティ・フォレストや共同狩猟域 (community hunting zone) が設けられるなど、特定地域における住民の森林利用と住民主体の資源管理が法制化されている。住民による「伝統的な方法」での狩猟はすでに1981年の狩猟法 [Government of Cameroon 1981] でも形式的に認められていたが、1994年の改訂狩猟法ではその権利がさらに拡大されたものとなった。何が「伝統的」な狩猟であり、どこまでが「生計」のための狩猟であるか、また実際にどのように管理計画が策定され、承認されるかといった問題はあいかわらず曖昧なままであるが、少なくとも形式的には住民の側に有利な方向に事態が推移しているように見える。

しかし、問題は地域住民の生活保全や権利確保の問題だけではない。そのような実際面での対

処が必要なことはいうまでもないが、それだけで問題が解決するわけではない。自然保護計画によって、住民が長年慣れ親しんできた森から切り離されることが問題なのである。そこで公園管理や住民の権利保全という発想から離れて、いかにして西欧的な二元論を超えて、森と人間が共存する世界を描くことができるかを考えてみよう。

4. 森と人の共存世界

森と人の共存世界をイメージするうえで、私が依拠するのはコンゴ盆地に住む森の民の例である。私たちは1970年代前半から、通称ピグミーと呼ばれる狩猟採集民の調査をつづけてきた[市川2001]。初期の調査では、もっぱらコンゴ民主共和国(旧ザイール)のイトゥリ(Ituri)の森に住むムブティ・ピグミー(Mbuti Pygmies)のところに通り、生業活動や社会組織、自然認識等に関する民族誌的な調査を行っていた。1990年代初めにザイール(当時)の政治情勢が悪化したために、コンゴ川対岸のコンゴ共和国に調査地を移し、中央アフリカ共和国との国境地帯に住むアカ(Aka)・ピグミーの調査に従事した。しかし、その2,3年後にはコンゴ共和国の情勢も悪化したため、さらに西側のコンゴ盆地西端に位置するカメルーンに転進し、バカ(Baka)・ピグミーの調査に切り替えざるを得なくなった。この10年ほどの間に、ザイールからコンゴ、そしてカメルーンへと、「調査難民」のように調査地を変えてきた。余儀なくされた転進ではあったが、おかげでアフリカを代表するピグミー系狩猟採集民のすべてに接することができた。

コンゴ盆地東端のイトゥリの森から西端のカメルーン南東部までは直線にして2,000kmもの距離がある。また、イトゥリの森のムブティやエフェ(Efe)はバントゥー語系あるいはスーダン語系の言語を話すが、バカはそれらとは系統が異なる東アダマワ系の言語集団に属している。こうした空間的隔たりと言語の相違にもかかわらず、これらの森の民の間には驚くほどの文化的な共通性がみられる。いずれも森に対する強い依存と深い関与を通して形成された「森の文化」を共有している。

森の民は森の動物や植物について驚くほど豊かな知識をもっている。それは、彼らとほんの数時間でも一緒に森を歩いてみればすぐにわかることである。周囲を埋め尽くす植物や地面にかすかに残る足跡、頭上にさざめく物音から、彼らがどんなに多くのことを語ることか。また彼らの森のキャンプを一瞥するだけで、彼らがいかに多くを森の産物に負っているかが理解できる。半球型の小屋をはじめ、運搬用の籠や蔓などは、すべて森の素材だけからできている。キャンプのあちこちには森で採集してきた果物や芋などの食物残渣が落ちている。子どもたちの遊び道具も森の植物の実や葉でつくったものが多い。そして日が暮れば、わきたつようなポリフォニー(多声合唱)に呼应して森の中から現れた精霊とともに夜更けまで歌い、踊る。食生活や住居、道具のような物質面だけでなく、遊びや儀礼といったことにまで、どれだけ多くの生活の側面が森と密接に関わっていることか。彼らの文化は森の有するさまざまな可能性を存分に利用した

ものである。われわれは今、そうした彼らの森の文化の理解を目指して調査を進めているが、なかでも力を注いでいるのが植物に対する知識の収集と整理の作業である。「アフローラ (AFlora)」と名付けられたこのプロジェクトでは、物質的・精神的、また直接的・間接的な利用と認知、すなわち森の植物に関する彼らの知識のすべてについての記載が試みられている。それは、彼らが何世紀にもわたって蓄積してきた知的遺産、あるいは無形の文化遺産を保全する試みでもあるが、そのような試みを通して、はじめて彼らがいかに多くを森に依存しているかを理解することができよう。

このように森に依存する一方で、彼らがまさに森の中に住み、その資源を利用することが森の生態系の再生産に貢献しているという面を見逃してはならない。たとえば彼らが利用する食用植物には日光がよく当たる場所でしか発芽・成長しない、いわゆる陽樹が多い。森のキャンプ地などでは、中小木が刈り払われて日当たりがよくなるので、それらの植物の生育の条件が整えられるといえる。また、キャンプ地では、食べ残しの滓や果実の種子が廃棄され、そこからあたらしい植物が芽生える。実際、キャンプの周囲を歩いてみると、あちこちにそうして芽生えた有用植物の実生を見ることができる。甘い果実をつける森の木の実には、果肉と種子が離れにくいものが多く、それらは種ごと呑み込まれる。そのようにして、人間や動物の消化管を通して排泄されることによって種子の散布や発芽が促進されるような植物もある。さらに、森の中の広い範囲から集められた薪や食物などの生活物資が灰や糞便となってキャンプ地周辺の土壌を肥沃化するという効果も無視できない。つまり、植物が土壌から吸収した栄養分は、人間の消費を介してふたたび土壌に還元されるのである。ざっと試算したところ、50人ほどの集団が1ヵ月間キャンプに滞在する間に、食物だけからでも25kgほどの窒素と15kgほどのリンがキャンプ地周辺に蓄積されるという計算になった。熱帯雨林の土壌は養分が少ないといわれるが、キャンプ地は、森の中で稀薄に散在する養分を人間活動によって集積させた場所である。このように、キャンプ地周辺の有用資源は消費されて短期的には減少するかもしれないが、将来の再生産の種がまさにそうした消費を通して播かれている。いいかえれば彼らの生活は、森の資源を含む生態系の大きな循環システムの中にあるといえよう。

現在カメルーン東部の森において、アジア・アフリカ地域研究研究科大学院生の安岡宏和が森林環境に及ぼす人間活動のインパクトの調査にあたっている。森の中の原生的植生や、キャンプや集落、畑の跡地などのさまざまな植生において、それぞれ有用植物や動物の分布と生育状況、人間活動の痕跡とその影響について詳細な調査を行っているのであるが、この調査によって人間活動の環境に対する肯定的なインパクトが立証できれば、彼らは、単に森とその産物に依存するだけでなく、それらの再生産の条件をも整えていることがわかるであろう。このように、それ自体が複雑な相互作用系である生態系の中に人間を位置づけることによって、西欧的な自然と人間(文化)の二元論を乗り越えることができるのではないか。それは同時に、現在我々が目にする

森林景観の大半が、実は長い間の森と人の相互作用を通して形成された歴史的な産物だと認識することに通じる。そうなれば、人間活動を阻害要因としか考えてこなかったこれまでの自然保護のあり方に根本的な見直しを迫ることになる。

しかし、人間と森の共存システムは、もはやそれ以外の世界と切り離されて存在するわけではない。いかにアフリカの辺鄙な森の世界といえども、現在では多かれ少なかれ、より広い社会、すなわち国家あるいは国際的な経済・政治システムと接触している。自然保護運動や、そもそもその発端となった森林破壊そのものが、そうしたグローバルな経済や政治、情報の動きと密接にリンクしている。そうしたマクロな状況から遮断された「森と人の共存世界」を構築しようとするれば、それは、当該国政府や開発論者が非難するように、「生きた博物館」(living museum)をつくることになりかねない。生きた人間は博物館の標本ではなく、外的な状況と内的なダイナミクスの相互作用によって絶えず変化する存在である。

このことがただちに、彼らが外生的な政治・経済状況、あるいはそれを支配している「権力関係」の犠牲者であることを意味するものではないが、彼らの文化や生活は内的なダイナミズムだけで理解できるものではない。たとえば中央アフリカの森の民は、「エレファント・ハンター」あるいは「踊りの名手」として有名である。彼らがそういうふう近代世界において知られていく過程は、おそらく象牙や毛皮などの森林物産の交易や観光産業の勃興を通して、彼らが世界経済のなかで周辺化されていった過程と無関係ではあるまい。現在では彼らの大半が近隣の農耕民とのあいだにいくぶん従属的な関係を結んでいるが、そうした従属化も農業生産の拡大と労働力需要の増大という経済状況と密接に関係することであろう。あるいはまた、彼らが森で入手する獣肉や蜂蜜などが交易の対象になっており、そこから得た現金によって学校教育や近代医療へのアクセスが可能になっていることにも目を向ける必要がある。さらには、近年の国際的な自然保護運動の高まりは、彼らと農耕民との関係や、彼ら自身のアイデンティティや森との関係に変化をもたらすにちがいない。

したがって、地域のミクロなレベルでの森の民の生活や文化と、それらの「枠組」を与えているより広い社会のマクロな政治・経済システムとの関係を明らかにする必要がある。とくにアフリカ諸国の多くが政治・経済的に危機を迎えている現在、この関係にはさまざまな問題がある。その中で、森の民がどのようにしたらこうした問題に対処できるか、すなわち、市場経済や環境破壊あるいは自然保護運動といったグローバリゼーションの荒波を、どのようにすれば主体的にとらえ返していけるかについて検討する必要がある。

以上のように、「森の人の共存世界」のイメージは、(1) 人間の文化がいかに森の自然に依存しているかを示す文化生態学的観点、(2) 人間の居住や生業活動がいかに森林生態系の動態に関わっているかを示す歴史生態学的観点、そしてこれらがいかにマクロな政治・経済状況と関わっているかを明らかにするポリティカル・エコロジーの観点、を総合する作業を通して明らかにな

るのではないか。

5. カメルーンにおける新しい試み

国土の半分近くが森林に覆われたカメルーンでは、多くの人々が森林とその資源に依存しているが、なかでも森ともっとも強く結びついた生活をしているのがバカ・ピグミーの人々である。東部州のロミエ周辺、およびヨカドゥマ (Yokadoma) とムルンド (Mouloundou) を結ぶ道路沿いを中心に、およそ3万人ほどが狩猟や採集など森の資源に依存した生活をおくっている。ドイツ領だったカメルーンが第一次世界大戦後にフランスの委任統治領になった頃には、彼らはまだ、森の中での狩猟と採集を行いながら移動生活をおくっていたようである。しかし、その後フランスの政策により、1950-60年代に彼らの定住化がはじまった [Althabe 1965; Joiris 2000]。道路沿いの農耕民の集落に隣接して、農耕民と同じように泥作りの、しかしひとまわり小さいバカの住居が建てられた。周囲の森を拓いてプランテン・バナナやキャサバなどの栽培も行われるようになった。しかし農業は自給をまかなうには十分でなく、森における狩猟と漁撈、堅果や果実、根茎の採集は依然として重要な生業である。また季節的であるが、蜂蜜や食用昆虫の採集も重要な活動となっている。近隣の農耕民からは、これらの林産物との交換や、焼畑の伐開や除草、収穫等の農作業の手伝いによって、不足する農作物を得ている。とくに、カカオやコーヒーなどの換金作物栽培が盛んになると、農耕民はそれまで以上にバカの労働力を必要とするようになった。その一方で、最近ではバカの中にも十分な畑を開墾して農作物を自給したり、自分でカカオ栽培を始める者が現れており、農耕民との間にアクセスのよい土地や労働をめぐる争いが顕在化しつつある。

バカの居住域で小規模な伐採が始まったのは1970年代であるが、1990年代に入ると前述したように、経済危機や構造調整の影響を受けて伐採規模が飛躍的に拡大した。対外債務に悩むカメルーン政府が、債務と引替えに伐採権をフランスなどの債権国に売ったからだといわれている。私たちが調査を始めた1994年頃には、東部州のヨカドゥマ方面からだけでも毎日平均100台、雨季の道路が悪いときでさえ毎日50台ものトラックが巨木を積んで港のあるドゥアラ (Douala) 方面に向かっていった。森を貫く道路の両側は居住区および農耕地として伐採を免れていたが、それは背後の荒廃を隠す衝立のようなもので、少し森の奥に入れば伐採道が縦横に走っていた。

こうした急速な森林破壊に対して国際的な関心が寄せられ、1990年代から自然保護運動が盛んになってきた。中央アフリカのザンガ-サンガ地域が1990年に国立公園に指定されると、公園管理の面からも、中央アフリカ、コンゴ、カメルーンの3カ国にまたがる国際保護区 (transfrontier conservation area) の必要性が唱えられるようになった。これに呼応してカメルーン側でも、WWF や WCS (野生生物保護協会、アメリカの非政府組織) 等がサンガ (Sangha) 川西岸一帯の保護計画の基礎となる生態学的な調査を実施した。活発な保護活動を受けて、1999年

には WWF 総裁のエジンバラ公がサンガ川西岸のロベケ (Lobeke) 地域を視察している。それから 2 年後の 2001 年 3 月 19 日に、ロベケ川流域のスワンプ地帯を中心とする 212,500 ha がカメルーン政府によって国立公園に指定された。また、この計画に少し遅れて、ブンバ (Boumba) 川、ベク (Bek) 川、ンキ (Nki) 川流域に広がるおよそ 670,000 ha の森林をジェンギ (Jengi) 国立公園としてあらたに保護しようという計画¹⁾が進行中である (図 1 参照)。ちなみにジェンギとは、バカ・ピグミーの儀礼に登場するもっとも重要な森の精霊の名である [都留 1996]。

これらの保護計画においては、いくつかの新しい試みが行われている。まず、保護地域内で人間による森林資源の利用がある程度容認されている。ロベケでは、近くの森を縦横に走る伐採道路を伝って外部から密猟者が侵入し、銃を使った狩猟やペット用のオームの捕獲を行っている。しかし、そのような状況にもかかわらず、当面のあいだは現地住民の国立公園への立入りと漁撈や植物性食物と蜂蜜、薬用植物等の採取が認められている [WWF-Cameroon 2001]。また公園管理の方法として、従来の上意下達による官僚的な森林管理に代わって、適応的管理 (adaptive management) という新しい方法が試みられている。これは、生態系には予測不可能な事態が起こりうるとの認識にもとづいて、あらかじめ決められたマスタープランにしたがって保護計画を進めるのではなく、住民との対話を通じて、また状況の進展に応じて計画の見直しができるような柔軟な方法によって保護計画を推進しようというものである。さらに地域の住民を森林の破壊者、保護計画の阻害要素とするのではなく、森林生態系の構成員と位置づけ、保護計画の積極的な担い手と考えている点でもユニークである [Davenport 1998; Curran and Tshombe 2001]。実際問題として、周囲何百 km にも及ぶ広大な保護区を強制的に保護しようとするれば、密漁の監視のためだけにでも膨大な人力と資金を要する。それを考えれば、住民による主体的な保護の方がはるかに経済的かつ効果的ということになる。自然保護のためには、「野生の楽園」方式による厳密な保護の方が住民の利用を容認した多目的利用保護区 (multiple-use reserve) より有効とはいえないこともわかってきた。

それでもなお、バカのような人々が保護計画に積極的に参画するにはさまざまな障壁がある。そのひとつは、保護計画やそれと抱き合わせて進められる開発計画が彼らの文化の否定をともなうことである。Hewlett [N. D.] も述べているように、バカの開発計画に関わっている政府役人と外国由来の NGO は、ときに厳しく対立するにも関わらず、バカに対する認識を共有している。それは、バカの開発とはつまりのところ、彼らのより一層の定住化と農耕化であり、それを通してのみ彼らの農耕民からの自立と国家社会への参画が達成されるという認識である。同時に彼らは、バカの社会にリーダーをつくることによってこうした変化への移行が容易になるとして

1) 最近現地から入った情報によると、ジェンギ国立公園の予定地を貫通して伐採道路が建設されることになり、計画の大幅な変更を余儀なくされているという。

いる。しかし、これらはいずれも平等的な社会をつくって、森の中に季節的な移動をしながら狩猟採集を行うバカの現在の生活と文化の否定を意味する。

さらに、保護計画の導入方法に関する問題がある。最近の報告書はほとんど例外なく、保護計画の推進にあたっては現地住民との対話が不可欠と指摘している [cf. Curran and Tshombe 2001]。しかし、バカのように「二重の周辺化」にさらされてきた人びと、すなわち植民地時代から周辺化されてきたカメルーンの中で、さらに周辺化の圧力を受けてきた人びと（もっとも彼らは「森の中に逃げ込む」などして、そうした圧力から逃れてきたのであるが）が保護活動の積極的な担い手となるのにはさまざまな困難がある。現地における実際の保護計画ではまず、自然保護団体や政府の出先機関によるサンシビリザシオン、すなわち保護の必要性に関する関心の喚起が行われる。この地域では、自然保護の教育と計画の普及は通常アニマテール（推進者）と称するリーダー役が地域住民の中から選ばれてあっている。最近始まったジェンギ・プロジェクトにおいても、WWF や GTZ（ドイツ政府の援助組織）などから派遣されたアニマテールの熱心な活動によって、いくつかの農耕民の村ではすでに、住民による主体的な公園の保護と管理に関する合意ができてつあると聞く。しかしもっとも強く森に依存するバカ・ピグミーに関しては、この計画はほとんど進展していない。問題は、アニマテールの選出方法と彼が語る言葉にあると考えられる。アニマテールはまず例外なく、優位な立場にあるバントゥー系農耕民の中から選ばれている。平等主義的なバカの社会から、リーダー役を選ぶことは難しいかも知れない。しかし、日頃から農耕民に従属的な地位を強いられ、侮蔑のまなざしで見られているバカの人々が、農耕民出身のアニマテールの言葉を素直に信用するとは思えない。少なくとも、それによって自分たちの狩猟採集活動を制限しようとは思わないであろう。アニマテールの保護活動とは裏腹に、バカたちの間ではすでに、いかにして密猟をうまくやるかが話題になっているとも聞く。

さらにアニマテールは、対話を通して住民をさりげなく保護の方向に誘導することが期待されているにもかかわらず、実際には集まった村人を前に、教えられた内容を演説口調で反復することが多い。それでも農耕民の方は、そうした機会をとらえて自分たちを積極的に保護計画の推進者として位置づけていくが、バカがこうした説得に耳を傾けるとは思えない。実際、この地域で推進運動の実態を調査した服部志帆（アジア・アフリカ地域研究研究科大学院生）によると、最初は要求されるままに会合に集まってきたバカたちの大半が、即物的なメリットが無いことがわかるとすぐに姿を消してしまったという。そのときバカのハンターたちは、「たとえ禁止されても、われわれは狩り続けるしかない」と呟いたということである。この言葉に、公の場での自分たちを表現する言葉を持たない者たちの当惑と、静かではあるが断固とした抵抗の表現を読みとることができる。それは、保護計画という新しい状況に「主体的に」関わっていこうとする農耕民とは対照的な姿勢である。保護計画にバカの人びとの積極的な参画を促す道は、彼らが農耕民への従属化、すなわち「二重の周辺化」の圧力から解放される道ともなるにちがいない。

引用文献

- Althabe, G. 1965. Changements sociaux chez les Pygmées Baka de l'Est-Cameroun, *Cahiers d'Etudes Africaines* 2(5): 561-592.
- Attwell, C. A. M. and F. P. D. Cotterill. 2000. Postmodernism and African Conservation Science, *Biodiversity and Conservation* 9: 559-577.
- Bikie, H., J-G. Collomb, L. Djombo, S. Minnemeyer, R. Ngoufo and S. Nguiffo. 2000. *An Overview of Logging in Cameroon*. Washington, D. C.: World Resources Institute.
- Crandell, G. 1993. *Nature Pictorialised: "The View" in Landscape History*. Baltimore: John Hopkins University Press.
- Curran, K. B. and R. K. Tshombe. 2001. Integrating Local Communities into the Management of Protected Areas: Lessons from DR Congo and Cameroon. In Weber, W., L. J. T. White, A. Vedder and L. Naughton-Treves, eds., *African Rain Forest Ecology and Conservation*. Cambridge: Yale University Press, pp.513-534.
- Davenport, T. 1998. *Management of the Proposed Lobeke National Park*. WWF Discussion Paper, WWF-Cameroon.
- 古川久雄. 2001. 植民地支配と環境破壊』弘文堂.
- Government of Cameroon. 1981. *Loi Portant Régime des Forêt, de la Faune et de la Pêche*.
- _____. 1994. *Law No.94-01 of 20 January 1994*.
- Hart, J. 2000. The Impact and Sustainability of Indigenous Hunting in the Ituri Forest, Congo-Zaire: A Comparison of Unhunted and Hunted Duiker Populations. In Robinson, J. G. and E. L. Bennett, eds., *Hunting for Sustainability in Tropical Forests*. New York : Columbia University Press, pp.106-153.
- Hewlett, B. N. D. *Government and International Non-governmental Organizations' Perception of Baka Pygmy Development*, Manuscript.
- Joiris, D. V. 2000. *La Chasse, la Chance, le Chant: Aspects du System rituel des Baka du Cameroun*. Thèse doctorat en Sciences Sociales. Université Libre de Bruxelles.
- Ngegues, P. R. and R. C. Fotso. 1996. *Chasse villageoise et Consequences pour la Conservation de la Biodiversite dans la Reserve de Biosphere du Dja*. Yaounde: ECOFAC.
- 市川光雄. 2001. 「森の民へのアプローチ」市川光雄・佐藤弘明編『森と人の共存世界』京都大学出版会, 3-31.
- Noss, A. J. 1998. Cable Snares and Bushmeat Markets in a Central African Forest, *Environmental Conservation* 25: 228-233.
- Neuman, R. P. 1998. *Imposing Wilderness: Struggles over Livelihood and Nature Preservation in Africa*. Los Angeles: University of California Press.
- Sunderlin, W. D., O. Ndoye, H. Bikie, N. Laporte, B. Mertens and J. Pokam. 2000. Economic Crisis, Small-scale Agriculture, and Forest Cover Change in Southern Cameroon, *Environmental Conservation* 27(3): 284-290.
- 都留泰作. 1996. 「バカ・ピグミーの精霊儀礼」『アフリカ研究』49: 53-76.
- Wilkie, D. S. and J. F. Carpenter. 1999. Bushmeat Hunting in the Congo Basin: An Assessment of Impacts and Options for Mitigation, *Biodiversity and Conservation* 8: 927-955.
- Williams, R. 1973. *The Country and the City*. London: Chatto and Windus.
- WWF-Cameroon. 2001. *Jengi: l'Esprit de la Forêt*.